

崩れ行く日本語

赤谷慶子

最近、日本語の話し言葉とみに崩れ行くが故、うれふるなり。敬語解せざる人々増加してあり。二年前なりしか、朝日新聞の雑誌上「のほう病」といふ記事讀む。「何々の方」と必ず入りたるを、丁寧なりと考ふる人たちが多きこと原因なりと断定す。例へば、「レジの方でお支拂下され」「こちらの方」等なり。奇しき考へなり。最近感ずるは、「何々を致す」にて十分なるに「させて頂く」。例へば「缺席仕る」を、「缺席せさせたまへ」となる。かやうなる物言ひを丁寧なると思ふこと可笑し。加へて、敬語を間違へて使ひたるケースも多し。例へば電話にて自分の上司留守なる事を伝ふるに、「部長さん是不在にされてゐます」。これはさる大銀行の對應にて、最近社員教育をせざるかと愕然たりき。例へ社長なれども外部に対しては名前の呼び捨ての筈なり。

話し言葉崩れて行くひとつの要因にテレビあり。番組にて話さるる言葉いと汚し。最近妹ドイツより三年ぶりに帰國したりき。妹は小學生低學年の頃、白金にあるミッション系の女子校に三年のみ通ひたりき。その後は海外生活のため、すべて英語にての教育を受けたりき。現今の如く海外に日本語學校等はなかりしかば、英語母國語のやうになりたり。されど、彼女の話す日本語はいと綺麗なり。テレビなどに侵されたらぬ昔の人話すやうなる日本語にて、當然敬語もきちんと話す。義弟はドイツ人にて日本語解せざるが、「妻の話す日本語は、意味は分からざれど、音美しく滑らかなる印象あり」と言ふ。なるほど、流行り言葉使ふ能はず、日本語を選びつつ、せかず、短縮せずに話せば、音美しきは必然なるべし。

英語は確かに共通國際語として君臨するありといへども、何も小學校低學年にて教ふる事など必要なく、むしろ自國の言葉をきちんと話せることこそ先決ならむと、強く思ふ。自國語をきちんと話す能はざるはこれほど恥づかしき事はなし。英語はあくまでも外國語なり。外國語話す能はざるはは恥づべきことならず。